

カテゴリー I

プロジェクト名:

# 環境に優しい移動手段による持続 可能な中山間地域活性化

プロジェクト代表者名：大日方 聡夫

## < 鬼無里地区の課題 >

- \* 若者の流出による高齢化・過疎化・里山荒廃・耕作放棄地の増加に直面する鬼無里地区の再生。
- \* 持続可能な鬼無里社会形成には、若者の流出を減らし、I/Uターン者を迎えることが必要。
- \* 年金が無い若者も普通に就労すれば、生活できる環境の構築が不可欠。
- \* 必要条件は雇用機会の創出。

## < 鬼無里のエネルギー事情 >

- \* 昨年鬼無里地区で焚かれた灯油は、約851,000Lであり、そのうち7万L余りは「鬼無里の湯」の加熱に使われた。平均一戸あたり10万円の灯油代は、地区内で活用されることなく、地区外に流出している。
- \* 現在、鬼無里地区の木材は全く搬出されることなく朽ちている。里山の荒廃は高齢化の象徴であり、住民は現状に不本意である。
- \* 鬼無里地区における自然エネルギー（木質バイオマス、水力、太陽光）の活用は、里山の再生や雇用機会の創出につながる。

## < 検証すべき仮説と社会実験 >

\* 鬼無里地区における自然エネルギー（木質バイオマス、水力、太陽光）、特に木質燃料に期待できる効果は、

- ① 木質燃料の生産、運搬、加工、活用、それらの波及効果で雇用機会が生じ、I/Uターン者が増加する。
- ② 里山の整備、木質燃料の活用で、CO<sub>2</sub>削減など持続可能な環境共生社会実現に向けた動きが始まる。
- ③ 石油文明からの脱却とエネルギー自給率向上に寄与。

\* これらを考慮して、I/Uターン者対策を進める。

\* 灯油から木質燃料への切り替えには、化石燃料で経験した「利便さ」の返上を要求されるが、自然との触れ合いで、この「返上」を上回る心の豊かさを謳歌する機会が生まれる。

# <具体的な取り組みのシナリオ>

## ●工学的技術要素

- ①公共施設の化石燃料を木質燃料へ
- ②冬期家庭暖房を木質燃料へ
- ③小水力や太陽光での電力により脱CO<sub>2</sub>型交通や農林作業を実現させる



## ●人的・社会的技術要素

- ①木質バイオマスのポテンシャル調査
- ②公共施設に関する長野市との話し合い
- ③高齢化に適した木質バイオ暖房の調査
- ④自然エネルギー関係の雇用機会を創出し、I / Uターン者を増やす



## ●得られる社会技術的成果

自然エネルギーの利活用で雇用機会をつくり、持続可能な地区住民の年齢構成を実現する。自然との共生で中山間地域と都市部の交流を深め、脱CO<sub>2</sub>社会実現を目指す

## <これまでの主な成果>

- ①鬼無里地区住民自治協議会（住民組織）がプロジェクトに協力する動きを始めた。
- ②この地区に興味を持ち、地区外から鬼無里を視察訪問する人が増え、一人の女性は定住を決めた。また、ある私立高校が鬼無里地区内の空き家（古民家）を研修施設として利用する可能性が出てきた。
- ③ある集落が小水力発電装置を設置した。
- ④まめってえ鬼無里と協力関係にある「里山クラブ」が生産した薪は、自然エネルギーを重視する複数の消費者に渡った。
- ⑤「自然エネルギーの長野県」を目指す組織、「自然エネルギー信州ネット」に加入、木質バイオマスの面で協力する。

## <東日本大震災対応>

- ①この震災が引き金となった原発事故（レベル7）は化石燃料に匹敵する深刻な一次エネルギー問題を提起した。
- ②自然の階層構造を考慮すれば、「原子力エネルギー」は、我々が存在する階層の自然法則では制御できない「異質性」を持つ。
- ③16回におよぶ招待講演で、この「原子力エネルギーの異質性」と自然エネルギーの重要性を訴えてきた。



<薪>



<終わり>



# < 研究開発全体像 >

## 鬼無里住民主体の実施体制

地元住民が具体的なシナリオ実施内容の決議と合意形成を行い、専門家が詳細な実施設計図を作る。その設計図に基づき住民が項目実施

### 鬼無里の在り方研究グループ 実施項目決定



地域 commons 構築・班



自然エネルギー活用・班



脱CO2型交通システム構築・班

### 住民意思決定 アドバイザー

住民ワークショップ実施・合意形成構築（ラウンドテーブル）指導、制度設計に関する助言

実施設計図作成委託

**研究開発支援グループ**  
学識経験者など専門家による実施シナリオ詳細設計図作成

地元主体の実施